

はじめに

著者	伊藤 敦規
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	137
ページ	1-4
発行年	2016-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00006093

はじめに

伊藤 敦規
国立民族学博物館

本書は、平成26(2014)年1月29日に、国立民族学博物館(以下、民博)で開催された国際ワークショップ「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有—民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望(英題: *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog*)」において発表された研究報告および討論を収録したものである。

本ワークショップは、民博が収蔵する民族誌資料の高度情報化とその利用を含めた協働環境整備を目指す「フォーラム型情報ミュージアム構想(Info-Forum Museum Project)」に関する課題と展望を明らかにすることを目的として開催した。フォーラム型情報ミュージアムとは、民博がこれまで収集してきた民族誌資料や映像・音響資料などを対象とした、より深みのある資料情報化のための複数の国際共同研究と、その結果を一般の人々に公開するためのシステム作りから構成される。ソースコミュニティの人々や連携研究機関の研究者から成る国際共同研究を組織し、新規に資料情報を収集する。そしてそのようにして得られた情報を日本語以外の関連言語に翻訳し、かつソースコミュニティの人々を交えて公開適正化を検討した上で、世界中のユーザーの閲覧と書き込みを可能とさせる、多方向的かつ互酬的なオンライン上の情報生成型データベースを公開し運用することを旨とする。

フォーラム型情報ミュージアム構想に類似する先行事例として、米国スミソニアン協会の極北研究センターが管理・運用する「Alaska Native Collections; Sharing Knowledge」や、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学附属人類学博物館が管理・運用し、北西海岸の先住民資料について26機関が情報提供する「Reciprocal Research Network」、そして米国南西部先住民ズニ博物館(正式名はA: shiwi A: wan Museum and Heritage Center、以下ズニ博物館)が主導する「Amidolanne^{アミドランネ}」などがある。最後に挙げたズニ博物館の例では、連携機関として英国のケンブリッジ大学考古学・人類学博物館や北アリゾナ博物館、UCLA 情報デザイン学部、米国スミソニアン協会(国立アメリカンインディアン博物館や国立自然史博物館など)などを擁し、世界各地の民族学博物館に所蔵されるズニ資料の情報をズニ博物館にて一元管理化するプロジェクトを進めている。

これらに対して民博のフォーラム型情報ミュージアム構想は、民博を起点としながらも対象とする民族集団が全世界を覆うので、複数のソースコミュニティと連携博物館との国際共同研究が必要となる点、資料収集活動が行われたのが過去40年以内であるため存命の資料制作者から直接意見を聞ける可能性が高い点、英語・日本語・現地語といっ

た多言語化を実現させる点で、新規性と独創性があると思われる。

本ワークショップでは、「Amidolanne」プロジェクトを主導するズニ博物館（2012年に民博と学術協定締結）のジム・イノーテ館長と、その連携機関である北アリゾナ博物館（2014年に民博と学術協定締結）のロバート・ブルーニグ館長（当時、2015年7月より名誉館長）を招聘し、現在進行形の「Amidolanne」プロジェクトについて運用者かつソースコミュニティとしての立場と、ソースコミュニティと地理的に近い位置に所在する地域博物館の立場から、それぞれ特徴を発表していただいた。また、ズニ博物館の協働カタログ制作計画（「Amidolanne」）では、ソースコミュニティにおいて高い秘匿性をもつ儀礼具などが対象に含まれる。しかもズニでは宗教的知識が複数の宗教結社やクランによって分断された形で継承されている。資料熟覧を担当することができるのは誰か、熟覧によって得た見解を共有できるのは誰か、宗教的知識は共有できるかもしくは非公開とするのか、といったソースコミュニティにおける公開適正についての具体策を伺うために、ズニの宗教指導者の一人であるオクテイビアス・シオウテワ氏を招聘した。

加えて日本からの話者は発表とコメントを含めて4名に行っていた。民博の野林厚志は、台湾原住民タイヤルの伝統工芸家・伝統服飾作家を民博に招き、民博が所蔵する古い資料を彼らに熟覧させて、重製の機会を促しながら伝統復興に寄与する研究活動を行ってきた。そうした台湾原住民による民博での資料熟覧経験や、その後の地元での伝統復興の様子を情報遺産の記録化という観点からまとめて発表した。また、本館展示場の音楽展示場やインフォメーション・ゾーンの新構築に携わり、そこで様々なデバイスを用いながら展示者と来館者とのインタラクティブな情報共有を図ってきた民博の福岡正太にはコメントを頂いた。下記にやや詳しく記すが、福岡は民博のフォーラム型情報ミュージアム構想の初期のワーキングのメンバーでもあった。そのためフォーラム型情報ミュージアムが向かおうとしている方向性を明示した上で、その意義を問いかけるコメントが残された。さらに、共催機関の北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治は、博物館資料に関する文化人類学的な調査の経験を豊富に持つ。山崎は現在日本国が進めているアイヌ政策やその最初の大きな取り組みとされる「民族共生の象徴となる空間」の具体的な計画を念頭に置きつつ、そこを舞台として近い将来に在外アイヌ資料調査で得た知見を、ソースコミュニティであるアイヌの工芸家などいかに還元・共有するかという観点からコメントを残して頂いた。山崎によると、民博のフォーラム型情報ミュージアム構想は2020年に開館予定の国立の新たなアイヌ博物館が取り組むべき課題の一つとも合致するので、相互に協力しながら、より広い視野に立ってこのフォーラム型情報ミュージアムの意義や将来像を設定すべきということを指摘頂いた。

フォーラム型情報ミュージアム構想を民博教員により深く知ってもらおうと考えたため、本ワークショップの対象とする主な聞き手は民博教員と設定し、平日に開催した。ただし民族学博物館および博物館人類学の最先端の議論を扱うため、館外研究者をメン

バーに擁する民博の2つの機関研究と1つの共同研究を関連プロジェクトとして加え、各研究プロジェクトと合同で開催した。それら二つの機関研究とは、「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究—ロシア民族学博物館との国際共同研究」(代表佐々木史郎)と、「文化遺産の人類学—グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」(代表飯田卓)であった。また、共同研究は「米国土土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」(代表伊藤敦規)である。

なお、岸上論文に詳述があるが、フォーラム型情報ミュージアムの構想は2010年代前半から抱かれていた。複数の教員から構成された構想ワーキングが館内に設置されたのは2012(平成24)年度であった。それ以後は構想ワーキングのメンバーを中心に15回の会合を開き、具体的にアイデアを練り、方向性を検討していった(2012(平成24)年度:12月4日、12月20日、2013年1月17日、1月31日、2月5日、2月21日、2月26日、3月11日。2013(平成25)年度:11月7日、11月19日、12月12日、12月25日、2014年1月22日、2月25日、3月27日)。本ワークショップはそうした一連の流れの中で、平成25年度民博間接経費「本館全体の研究の応用ないし発展に係る必要経費『クラウド型情報ミュージアム構築に向けた基盤整備』」(代表伊藤敦規)を財源として開催した(米国からの発表者の招聘に関しては、北海道大学アイヌ・先住民研究センターから一部費用負担してもらったため共催機関とした)。

2013年に文部科学省に対して概算要求を行なった結果、その申請に対し特別経費が認められ、2014(平成26)年4月から8年計画で開始されたのが「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトである。2014(平成26)年度には、予算措置に伴いそれまでのワーキングのメンバーを中心とするフォーラム型情報ミュージアム委員会が館内に発足し、運用面に関して多くの制度化が行われた。本ワークショップは、このプロジェクトの立ち上げ直前に、民博で開催された最初の公式な研究集会であったことを記しておく。

このようにこの数年間でめまぐるしい状況の変化があったため、岸上報告の原稿については本ワークショップの成果を反映させている2016年4月現在の最新の状況についてまとめたものを掲載した。また、英文に関しては、本ワークショップの成果を反映し民博英文ホームページに掲載している“An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A New Development at the National Museum of Ethnology”を加筆・修正したものを掲載することとした。

なお、日本語での発表論文と須藤健一による挨拶、2つのコメント、および全体討論は、総合研究大学院大学院生の中田梓音が文字起こしをし、英語で発表が行われた論文とコメントについては、国立民族学博物館外来研究員のマジェッツ・アグネシカが文字起こしをし、伊藤が全てを監訳した。英訳および邦訳の全責任は編者である伊藤にある

ことを申し添えたい。



会場の様子